

日時計

売れる。学校では、この地域は海面より低い海拔ゼロメートル地帯にあり、水害の危険性もあると教わ

「あなたのような人にこそ、書いてほしいのよ」。水をテーマにした連載記事の取材で昨年11月、荒川の治水・利水を研究しているさいたま市のNPO法人「水のフオルム」理事長の藤原悌子さん(64)を訪ねた時のこと。私の出身地に話が及ぶと、こう語りかけられた。

生まれ育った東京・葛飾区の上平井地区は、西に荒川、北と東には利根川水系の中川、新中川が流

水はつながっている。「荒川の下流域があふれないのは、埼玉のおかげ」。藤原さんの話に驚いた。荒川は、下流よりも中流の川幅が広い、珍しい川。増水時は東京を守るため、中流の堤外地(河川敷)に水をあふれ

させるという。そこには今も人が住み、神社や田畑もある。私の故郷の安全は、中流域の方々の負担の上に築かれていることを知った。

埼玉から利根川の上流に目を向けると、群馬県の八ッ場ダムに行き着く。埼玉にとっては治水対策面もさることながら、水道水の安定供給に欠かせない重要なダムだ。「もっと上流に目を向けるべき。水はつながっているのよ」。今、埼玉県民としても藤原さんの言葉をかみしめている。

(太田雅之)